

方法主義へ

内藤 莞爾

九州から仙台までの旅は相当なものであった。しかし報告者の真摯な研究や傾向の熱心な態度を見て、矢張り来てよかつたと思つた。個々の研究報告を離れて、大会全体をふり返つてみた場合、そこには考えてみるものがないとはいえない。特に問題の焦点がいささかボヤけて一つの像を結ばず、何となく *blurred* に終つたことにはかえ

すがえすも惜しかつた。これは司会者の罪といふのではなく、問題提出の仕方をもちと限定しなかつたところから、或る程度、予想されるものであつたともいえる。けれども、そうした欠点をカブアしてあまりあるものは、農地解放とそれをめぐる諸問題の多様性、またこれへのアプローチの仕方についてもさまざまのものあることを教えられた点である。私はむしろ今度の大会の意義はこの収穫で充分果されていふと思つてゐる。裨をぬいだ懇親会の雰囲気も印象に残るものである。

日本社会学会の「農村」の「漁村」の部報告も私はなるべく聴くようにしてみた。これらも含めて、仙台ではいろいろなものもを教えられたが、また反省させられる点が無いとはいえない。全体的にいって、日本の実証研究はいろいろな問題を捉えて、これを提示することにおいては著しく進歩した。にもかかわらず、その問題はむしろ「对象的」に与えられたものであつて、「方法的」に求められたものでない。つまり方法的には依然として低迷してゐるといふところである。特に社会学的研究の場合、私はあなたがち山間僻地に出掛けるばかりが能くないと思つた。俗にいひ方をすれば、頭を働かせさせずれば問題や対象は幾らでもあろう。もちろん、日本の社会は地域的にも解明されない部分が多いのであるから、前のアプローチを否定すべきではない。私は社

会学が民族学や史学と袂を別つべきことといふのではない。が、それにもかかわらず、社会学の特異性を主張するならば、「対象主義」より「方法主義」にむしろ将来性を認めたいのである。(九州大学)